

## 第2回水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会 議事概要

1. 日時：平成26年1月16日（木）10:00~12:00

2. 場所：公益財団法人リバーフロント研究所 AB会議室

3. 出席者：別紙

### 4. 議事の内容

#### (1) 第1回懇談会の議事概要について

- ・事務局より、第1回懇談会の議事概要について説明を行った。

#### (2) 事例紹介

- ・3名のコメンテーターより、これまでの活動状況や課題について事例紹介を行った。

- 〇〇：・隅田川のeボートの写真。都市で働くサラリーマン、OLがアフターファイブに水に出て楽しめる方法はどういうものかと考えて行った取組。船で気分的に盛り上がっているのがわかる、ものすごく気に入っている写真。
- ・都市の水面を楽しみ方をもっと掘り起こして、使い倒して、楽しみ倒して、都市で生活している者が豊かな生活ができるようにしたいと考えている。都市に新しい水上経験をつくるということをモットーに活動している。
  - ・本日は、活動紹介、水辺の現状と課題、水辺とは、船とは、パブリックスペース、クリエイティビティ、プリンシパルの確認、という話をする。水辺というパブリックスペースの使い方は重要。創造性と水辺の関係もこれから大事になると考える。
  - ・最初の活動は運河に浮かぶ水上ラウンジを設置した。
  - ・また、水辺のマップを作成している。当時は水辺にフォーカスしたマップは無く、陸か海かどちらかで、その中間地帯をとにかく歩き回って調べて、作成した。場所としては京浜運河で、ここは東京の宝の一つではないか。20世紀はまさに世界の工場。歴史的な産業遺産でもあり、人の暮らしもすぐ背後にあるような面白い場所。
  - ・これは横浜トリエンナーレの作品として、バージ船を改装したもの。おもしろいのは、アートというと結構何でもできるということ。普通では実行ないようなことも出来る。
  - ・これは人が船から陸に上がる瞬間を捉えた写真。陸にあがってほっとする瞬間も船の良さだと思う。
  - ・これは災害対策支援船ということで国土交通省の支援を受けて実現したプロジェクト。災害時の支援の場を水辺に設けるということで、屋根に太陽光パネルを設置し、天ぷら油の発電装置をつけたりした。アートということで、船内で展示会も実施した。
  - ・また、栈橋をつくるプロジェクトも実施している。栈橋を新設するのは大変で、川の

流れを遮らないようにする方法などで苦労した。

- これは浜離宮の裏を探索するクルーズで、大変面白い場所だが、立ち入り禁止になってしまった。
- 首都高の入り組んでいる姿も活動するうちに愛着がわいてきた。雨の日もクルージングができる。このような水辺も東京の水辺の一つの魅力。外してもらっても構わないが。
- これは横浜駅を出たすぐで、電車が水面のすぐ近くを通っている。なぜかわからないが、低い橋をくぐると人は妙に盛り上がる。
- BO 菜というイベントも実施している。
- SUP は新しい道具で、我々が今一番盛り上がっている活動。横浜の大岡川。すごくハードルが低く、誰でもすぐに乗れる。ボートなどと異なり、船好き、海好き、川好きでない一般の人が活動を始めているため、すごくポテンシャルがあると思っている。
- 黄金町で棧橋を貸していただき、ボートピープルが管理運営も手伝いながら活動している。ここで、今までは水面だけで活動していたが、町の人たちと一緒に活動をしていく、まさにまちと水辺が繋がった場所で活動が広がっていくという体験をした。
- 現状と課題。たぶん東京の水辺が世界で一番自由度が低い。水辺は基本的には港とか工業で使っている場所が多いので自由度が低いのは確か。ロンドンもニューヨークも変わりはない。ただ東京の場合はそれが顕著で結果的に訪れる人が少ない。遊歩道とかを作っても人がいない。
- 水辺とクリエイティブ性というのはすごく重要だと思うが、クリエイティブ感が東京では全然起こっていない。海外ではアーティストとかクリエイターとか、もしくはちょっと先をみるビジョンを持っているような企業が水辺にどんどん集まるような動きになっているが、東京はそれがまだ全く起こっていない。
- また、水辺が分断されている。よく言われる縦割り行政であり、水辺では顕著。
- 水面は基本的にはパブリックスペースのはずだが、「パブリック」と言った瞬間に、逆に使いにくくなっている。利用者の空間になっていない。業界であるとか既得権者のものになっている。それから広くて浅い不特定多数の声、例えば、水辺でイベントやりたいと言っても、横にあるマンションのたった一人の方が **NO** と言うとできないということが、あらゆるところで起こっている。ここがすごく課題だと感じている。
- 船には移動手段という以上に別の機能がある考えている。一つは人と人をつなげるコミュニケーションツール。第1回の懇談会でも会議終わった後の雑談、議論のライブ感、盛り上りはすごくよかった。また、ミシェル・フーコーはヘトロピアという日常の延長線上にあるが、日常から切り離された理想郷の例として、博物館などと共に「船」を挙げている。
- いま都市の国際競争力を決めるのはクリエイティブ性、もっといえばアートの考え方。テムズ川では、アーティストが棧橋を自分たちで造って、暮らしをしている。す

ごく重要と考える。

- プリンシパルの確認。①水辺幸福追求権。全ての人は水辺で幸せになってしまう権利が元々ある。②自己責任の原則。水辺では自分の身は自分で守る。他の人に責任を被せるということはしない。③航行の自由の原則。浜離宮の裏の水面も、本来はパブリックスペースだから誰でも通れる権利があると思いたい。④水辺自由使用の原則。水辺という広いエリアもパブリックスペースと考えれば、誰もが使えるようなものにしていきたい。

〇〇：• 日本の歴史を考えると水辺が一番自由度があった。

- 盛り場も芝居も怪しげなこともクリエイティブなことはみんな水辺から生まれた。京都も隅田川も金沢も。それが近代に治水が重視され、舟運がなくなり、人の手から水辺が離れてしまった。それで管理する対象になったので自由度が下がった。今またルールを作りながら自由度の高い空間にしていくということ。
- ニューヨークでは水際の大きな倉庫アーティスト達に移り、今はそこが産業、経済、文化の発信地になっている。

〇〇：• 私たちは都市を選んで住むという自由を手に入れ、土地に縛られるということが段々無くなっている。都市間の移動が激しいヨーロッパでは町に愛着を持たずに住み続けていくという人が非常に多くなってきている。

- その中で、都市再生の時に、ハードだけではなく、そこに住む誇りや意味を人々が得るためにどのような方策をするのかということが問題になり、ハード整備とソフト整備が共に行なわれるようになってきている。それを2008年に本にまとめた。
- EUの背景。都市間競争が増え、産業構造の変化から都市再生をしないと都市が立ち行かない。ハード面のみではなく、ハード面とソフト面が一緒にならないと産業構造だけではなく都市構造自体の変化についていけないのではないか、というところから、「都市再生」「未来のビジョン」を人に届ける戦略、を主に取り始めているというのが大きな側面。
- 都市が人とコミュニケーションをする必要がある。町の中にコミュニケーションツールというのはものすごく沢山あるが、本当にコミュニケーションツールとしてデザインされているのかというのが我々の大きな問題提起。
- まちというものを頭で理解したり、共感したり、体験したり、アイデンティティを感じたりということ、まちの中の様々なポイントから感じているはず。
- シビックプライドはまちづくりを通じて、人々の心の中に育まなければならないものであり、政策ではない、ということ、イギリスのミリバンドは言っている。
- それぞれのまちがそれぞれの地域性を活かして、うまく組み合わせることでそのまちならではのアイデンティティ、体験、共感というものを作りあげている。
- 水辺も町のひとつ。例えばハーフェンシティはエルベ川沿いの旧関税都市だが、今

まで誰もはいらなかったことをまちに開く、というプログラムを行っている。ドイツは工事現場を見せる。よく行われている。工事現場を見ることができ仮設の塔や工事現場を見るためのクルーズを行っている。水辺とまちの関係を如何に作っていくのかということ、土木工事をする間から人々に届けようとしている。水辺の広場というものをどういうふうに造っていくのが計画に入っているが、建築よりも広場を先に造って、建築をしている隣のところで、人々がすでにワークショップやイベントをしている。テラスで人々が工事現場のまちを眺めるということが行われている。

- ・イギリスのニューキャッスル市とゲイツヘッド市。創造都市としても有名。つり橋の美しい動きを見るために両岸に見る場所が発達。ニューキャッスル側にはカフェがあって、ゲイツヘッド側は小麦の倉庫を利用した美術館が造られていて、その手前が広場になっていて人が集まっている。橋を架けることによってニューキャッスル・ゲイツヘッドという新しい芸術文化圏、都市文化のエリアを作っている。
- ・ボルドーはガロンヌ川の川沿いの整備を沢山している。川の左右岸を西側が文化的、東側が自然というように、同じ様に整備するのではなく、区別をしながら楽しみ方が違う。両岸の風景が違うが、相互にイメージを交換するようになってきており、面白い風景を作っている。
- ・世界の都市は水辺をまちの中心として捉えているところが非常に多い。水辺とまちというものを如何に繋げていくのかということがアイデア、デザインで作りに上げられている。トラムや自転車、船などのように連続性として作られている。
- ・水辺の産業遺産を活かすという視点。産業遺産の大きな倉庫や造船所などに徐々にアクセスできるようなかたちを取っている。造船所の近くに何かできるような広場があったり、倉庫や造船所が、美術館やレストランになっていたりしている。
- ・パブリックスペースというものが誰のものでもなくなってしまっているのが課題。ヨーロッパでは市民のものとしての公共の整備が非常に大きくなっている。それと同時に市民が自分たち事として公共を楽しむ作法がデリバリーされている。この二つが無いと公共をただ開いているだけで、どんどん商業ベースになってしまっていて、どんどん汚くなっていく。
- ・まちの様々なベーシックな部分を整備するにあたって、どの様に人をまちに引き込むのかということやうまくモデル化していくことによって、使い方の作法というものを知らせることでまちと人がコミュニケーションをとっている。
- ・作法をデリバリーする、コミュニケーションをつくっていくということが、これからの公共土木、建築、そしてそこにソフトが入ってくるときに非常に重要。
- ・ピクニックの紹介。水辺でピクニックをすると、ものすごく開放感がある。ピクニックというのは（まちや水辺と人々が近づくのに）非常にいいツール。シンガポールのライトアップされた水辺のナイトピクニックの紹介。
- ・水辺をどう活用するかというアイデアはたくさんあるが、その楽しみ方の作法、ルールを以下にコミュニケーションするかが大事。

- 〇〇：・誰のものでもなくなる、というのが先ほどの自由度がない、と対になった指摘で面白い。
- ・EU では統合がどんどん進み、国境がなくなり、都市間競争で都市が活性化している。
  - ・水辺に多い産業遺産などが先端的・創造的な役割をしている。
  - ・誰のものでもなくなった公共空間をピクニックで取り戻すという活動も非常に興味深い。
- 〇〇：・東京都で進めている河川の賑わいづくりの取組や課題について、低地帯の河川づくりの歴史的経緯も交えて説明する。
- ・江戸時代から治水対策は進められてきた。徳川の時代に利根川の東遷なども行われた。近代に入っても水害との戦いは東京の課題であり、明治 43 年の台風では区部の 1/3 ほどが浸水した。それに対応して荒川放水路などをつくり、いかに早く海まで水を流すかという取組がなされた。一方で都市化、工業化により、地盤沈下という別の課題も出てきた。結果的に、区部の 2 割がゼロメートル地帯となった。
  - ・対応策として、スーパー堤防の取組がなされた。大川端地区は倉庫や工場だったものが都市化の進展で機能転換されるときに、開発と併せて水辺がスーパー堤防化された事例である。白髭西地区は、工場や木造密集地域だったところを都の再開発事業と併せて、水辺の空間づくりをした事例である。このような空間も開発と併せれば可能。
  - ・また、堤防全面の地盤改良などの際に、地域の特徴に併せたテラスを整備した。
  - ・地盤の低い地域では、人工的に水位を低下させ、地域の治水安全度を高め、生まれた空間に緑化や緩傾斜堤防をつくった。旧中川や小名木川の事例がある。また、北十間川について東京スカイツリー開発に併せ、人が歩ける空間とした。
  - ・このようにせっかく作った人が歩ける空間をどうやって利用するかという取組も最近始まり、川沿いでのオープンカフェ、大道芸、キッチンカー、東京ホテルなどの取組も行われている。
  - ・また、神田川で J R と協議して歩ける空間をつくり、日本橋でも船着場を整備した。
  - ・これからの課題をいくつか挙げる。堤防裏の管理用通路部分に張り出したテラス作りなどにも取り組んでいる。東横線の地下化に伴い高架の線路が不要になるため、渋谷川周辺の開発についても東急などと協議を進めている。合流部で途切れる川沿いの歩行空間をつなげる方法、川沿いの敷地幅が狭い空間のスーパー堤防化方策、夜間の照明なども課題と考えている。
  - ・2020 年のオリンピックに向けて、河川も景観や賑わい、舟運などに着目して取り組んで行きたい。
  - ・隅田川でアクセス性や開発の可能性などポテンシャルの高い地域について、メリハリをつけて色々な取組を行う考えを持っている。

- 〇〇：・基本的に日本は洪水から守るというのは絶対的な命題だが、守りながら、だけど活用できる形式というのを増やしてきて、スーパー堤防や水位低下の河川などの例がある。
- ・目黒川などはかつては洪水の常襲地域だったが、地下に遊水池をつくり安全度があがることにより、今は住みたい街の上位になるという、逆転現象も起きている。

### (3) 意見交換

事務局：資料3「議論のたたき台」の説明

- 〇〇：・資料3は、前回の議論だけの内容である。今回、既に3名の方から非常に重要な問題提起を頂いたので、それも合わせて再編成する必要がある。
- ・例えば、「公共空間なのに自由に使えない、使わない。みんなの気持ちや体質がそうなっている。それを取り戻す知恵と方法が必要」、「クリエイティビティをどうやって水辺に持ち込むのか」、「ハードをもっとソフトと一緒に考える」など。
  - ・たたき台は、資料3の様に多くの項目を並べるよりも、本質的なこと、原理的なことを言う必要がある。
  - ・資料3にある視点は枠組みであって、目指すべき方向性ではない。
  - ・細かいことを並べても、従来言われていることを越えることは難しい。
- 〇〇：・浮世絵などを見ると、江戸の水辺は色々な特色があった様だが、川によって固有のブランドがあるのではないのか？東京の川は運河のようになってしまったのか？
- ・地域植生を活かすなどの生態系への配慮も必要だと考える。人が中心の議論になっているが、環境の視点も重要。
  - ・行政やNPOはすでに様々な取り組みを行っており、手段はある。あとは組み合わせの問題だと思う。
  - ・エリア毎に街づくりの目指すべき方向性が決まっていた方がよい。
  - ・3.11以降、水辺が危ないという風潮があり敬遠されがちのため、その対策が必要だ。
  - ・東京の川は両岸に建物が立ち並んでおり、大規模な再開発は現実的ではない。既存の建物を活かしたリニューアル、リノベーションが現実的で、その場合の担い手はデベロッパーではない。費用については、補助金もあるが官民ファンドのようなもので、民間資金を誘因する工夫も必要。
- 〇〇：・クリエイティブな使い方を考えると、新しい建物よりも、広々している既存の倉庫の方が適しているという面がある。経済的にもその方が良いという面もある。
- ・永井荷風が『日和下駄』のなかで、東京の水辺のタイプを巧みに分類している。東京の水辺はバラエティに飛んでいる筈だ。
  - ・ドイツのハーフェンシティは水に浸っても良い構造になっている。

- 〇〇：・まずは、今ある環境がどれだけ価値があるのかを使って体感するきっかけづくりが重要であり、少人数、小さな団体が行動を起こせるしくみが必要。
- ・その関係者をつなぎとめる運用制度を再構築するという手順で取りくむべきである。水都大阪では、これを支えるパートナーズという民間組織を立ち上げている。
  - ・水辺は、都市の中で自然の要素が最もある場所だ。それだけ地域ごとの個性や魅力のベースとなる場所が数多くあるので、周辺の地域と共に考えると効果がある。
  - ・その分危険な要素もあるが、非常に楽しいところでもあり、こういった裏腹な場所が少なくなりすぎた。自己責任で使いこなすことを応援する必要がある。
  - ・水辺では発見行為ができる。この発見するものは各地域で異なるものだが、その想いが実感としてデリバリーされる感覚や仕組みが大切で、日本では自分達のまちで独自にルールを作って執行するということが少なすぎる。
  - ・地域独自のルールを生み出し行動を起こすことが重要だ。
  - ・この会議も前はすごく面白かった。次回以降は水辺でやるとか、公開して、「あんなことを真剣に話している奴らがいるんだ」ということを見せるべきだ。
  - ・ひとつのきっかけがあれば、多くのクリエイティブな人達が関係を持てる。
  - ・色々な人達が出会うことが大切である。それが水辺とその周辺の地域と連動して、その仕組みづくりができると良い。
  - ・時代も変わって来たので、行政管理にまかせっきりで陳情ばかりしている状況を変えて、自己責任を持つという前提にすると、河川の断面も、手すりのあり方も変わる必要があるということを、市民や民間側からも提案しなければならない。
  - ・河川管理者もこれまでの取り組みや仕事の誇りをキッチリと伝える必要がある。その上で、絶対に譲れないところと、創造力があれば自由度があるところを分けて管理することが大切。一律の管理方法では、水辺ににぎわいは生まれない。
  - ・そのハードルを越えるところにクリエイティビティが必要で、責任ある市民性も求められる。機会の平等を前提にした新しい公共のあり方を考えるべき。
  - ・水辺周辺の公園やオープンスペースの開発にもインセンティブを与えることが重要。
- 〇〇：・土木構造物、人間と水との付き合いの空間をみんなが理解し、水害の怖さと水辺の利用の両方をしっかり考える必要がある。
- ・カミソリ堤防ができたことで安全神話となってしまう、江東の人達が水害のことをあまり考えなくなってしまうことがある。
  - ・水辺はワクワク感があり、発見がある。全てのところが管理され、商業施設ばかりになってしまえば、うまくいかない。
- 〇〇：・水辺の活動のプロモーションも重要になってくる。わかりやすい対決、例えば「規制緩和対決！」という様なことをやると、全国の水辺のあり方も紹介できるし、しくみ

づくりや行動のきっかけも生み出せる。シナリオのないドラマ的なもので面白いものになり、注目されるのではないか。

- 〇〇：・今までは、「恐怖を伝達する」ことをやっている。それでは面白くない。  
・「ハプニングの伝達」でなければ。
- 〇〇：・個人の視点が大事であって、河川管理者総体ではなく、担当者個人の視点が大切。それは、先程お話しがあったクリエイティビティにもつながる。  
・また、川のブランドとも関係している。これからの時代に、川を全体として捉えてブランディングするという事は考えにくい。  
・それよりも、「その川にこの人がいて」、「こういう気持ちで活動している」ということに光が当たっていけばと思う。  
・その時に、伝えるのが下手だということがあるので、メディアや橋渡しをしてくれる人の役割が出てくる。
- 〇〇：・「カミソリ堤防にこんな意味がある」、「スーパー堤防はこういうものだ」、「ポンプ止めたら大変だ!」とか話すと、すごくウケる。こういった目に見えないことは、産業遺産だけではなく“文化”だ。  
・東京スカイツリーの話しだけしてもウケない。あの下に、コージェネレーションシステムがあって、出てくるエネルギーの方が大きいんだといったことを話すと、みなさん感動する。  
・今までは防御とかネガティブな話しだけだったが、ポジティブに転ずることが大切。  
・まちおこしをやっている、公共予算を使うと思われがちだが、そうばかりではない。  
・例えば、今は野沢温泉は外国人スキーヤーで大変な賑わいだ、なぜかという、自由に滑ってよし、そのかわりレスキュー代は自己負担という自己責任の概念をはっきりさせて導入したら、海外から人が殺到した。  
・きれいにしすぎるのもダメ。何故野沢温泉かということも、昭和レトロであるという要素がある。「川発で猥雑な街に出て行く」というデザインが重要。  
・いいもの作っても人が来ないとダメ。  
・そのためには、地元の元気な人と“よそ者、若者、ばか者”が1～2割くらい入る仕組みを川辺で作らないとダメ。  
・クリエイティブな人やアートをやっている人には自転車に乗っている人が多い。自転車通勤と川辺を結びつくと良い。  
・例えば朝の通勤ではハシケに自転車を載せ、夜はそのハシケを水上舞台として貸し出せば、借りたい人も大勢いるし、面白いことをしていると話題になり、観光名所にもなり得る。経済的に成り立つ。  
・墨田区では、通りをガーデニングの場所として使っていて、やっている人も楽しみ、



観光客にもウケている。必ずおばあちゃんがいて、「きれいな」と言うとおもてなしをしてくれる。

- ・川沿いをガーデニングに使えば、喜んで世話してくれる人が大勢いる。散歩する人とのコミュニケーションも生まれ、携わる人の生きがいにもなる。向島百花園の梅屋敷は、この仕組みでできたものだ。

〇〇：・ああいうガーデニングは本当に日本的で良い。

〇〇：・利用したい人にとっては、「こんなに良いことをしようとしているのに、何故ダメなの？」という疑問がある。

- ・一方。行政側には、「事件・事故が起きたらどうするの？」、「何故この人だけ許可して良いの？」という懸念が常にある。これを許可しても良いという大義名分が必要。
- ・この間をつなぐ、通訳というかコーディネータが必要。
- ・例えば、「アートならOK」という様に、行政目的に合致する場合ならOKということもあり得る。河川行政とは違う行政目的が必要になる。
- ・大阪の場合には、「水都大阪」再生のために、府市の関係部局による合同事務局としてオーソリティを設置したり、民主導の水都事業推進組織としてパートナーズという組織を作ったりした。オーソリティは観光部門と土木部門が一緒になったもので、そこが事務局となって水辺のプレーヤーを誘致するなり、コーディネートしてくれるパートナーを公募した。そこへ忽那さんが手を上げてくれ、今、パートナーとして活動してくれている。
- ・府市の観光部門と土木部門の縦割り行政からオーソリティに対して権限委譲がなされていたり、予算立ても可能となっていたりするかと言われれば、そこはあいまいで不十分なところがある。
- ・そのあいまいさ不十分さが解消されたコーディネータが必要。

〇〇：・東京の場合には、これをやりたいという様な提案はあまり来ていない様に思う。

〇〇：・造った物の維持管理や事件事故の対処などに相当の費用・人員が必要になる。

- ・ランニングコストや自己責任という使用者責任をも含めた包括的な管理をしてくれる民間が出てくれば、進むと思う。

〇〇：・東京にもやる気がある人はいる。ただし、どこに相談に行ったら良いのかさえわからない状態だ。

〇〇：・活動したい人はいるので、行政の窓口を一元化する必要がある。

- ・色々な人が水辺を利用したいと思っているため、バラバラに相談に行くのではなく、

合わせた形で協議に行ける様にしたい。水都大阪パートナーズのような中間支援も展開する組織を充実させることが可能性を高める。

- ・その責任を誰が担うのかという問題もあるが、水辺の利活用で利益を生むことができれば、保険の仕組みや一体的なプロモーションも可能になる。水都大阪では、それを牽引する規制緩和を含めた概念やBIDなどのオペレーションを提案している。
- ・それで一度やってみれば、たとえ失敗したとしても、「俺は絶対成功する」という次の世代が必ず出てくる。失敗ができない雰囲気をつくりだす、行政の補助のあり方などを見直し、チャレンジを応援する制度が必要となる。

〇〇：・道頓堀だけは、公募で選定した南海電鉄が管理者としてやっている。何かやりたい人は南海電鉄に申請している。ただし、儲かるものではない。

〇〇：・江戸の火除け地は、地元の有力者が仕切っていて、適切にお金を取っていて、上手く回っていた。近代それが無くなった。

〇〇：・何故、公共空間を管理する論理になったかということ、不法占拠を排除しなければならない背景があった。

- ・昔は的屋さんがいて仕切っていたが、今はそれを排除したので、新たな組織を作ってそこに管理させようとしている。
- ・利用の目的と河川行政の目的が合致するののかという問題がある。
- ・現在の河川行政は狭義であるため、周りのことも一緒になってやり、大きな行政目的を河川行政も担うという土壌を創らないと、管理的な問題は解決しない。
- ・その意味で交流人事が有効。

〇〇：・提案がどこかでおさえられているのかもしれない。

- ・公共空間は限度はあると思うが、誰でも利用できるというのが原則であり、利用したい人と管理者との間でやりとりをする中で、どのような利用なら問題が無いのか収れんしていくものだと思う。

〇〇：・今、「ヤミ市」研究が盛んになっている。日本の都市の原点でもある。

〇〇：・今日も話が出た、利用する側と管理者側のギャップを埋めることができれば解決できると思う。間に、例えば先程的屋や南海電鉄の様なワンクッション置くことが大切。

- ・役所的に考え、「やるからには、こんな成果が上らなければならない」と思うと面白いものがない。
- ・お金も付けるけれど、「好きにやって良いよ。ただし、期間限定ね」といったことがあっても良い。永久に残るものを作ろうとするからつまらないものになりがち。

- 例えば、大金をかけて壁画を作るよりは、ギャラリーとして開放し、次々に替わる方が良い。
- 参加したい人が参加できる仕組みを作れないか。
- 経済論理というのは、大企業の経済論理になっていることが多い。同じことでも中小企業であれば、経済的に成り立つことある。
- リノベーションの時代には、小回りがきく方が適合しやすい。
- 例えば、大規模開発であれば大企業で十分対応可能であるが、“猥雑さ”といった面白みに欠けるものになりがちである。
- 堤防沿いのビルの2階を改造して川沿いにデッキを張り出す様なものに、小額でも助成する仕組みができれば、面白いものになると思う。
- この様な第3の仕組み的なものがないため、せっかくあるリソースが、かみ合っていない。

○○：・臨海部は大きな工場や倉庫で占められており、個人や小さい規模の企業が入り込める余地が無い。

- やる気があっても、個人ではそういうところには入り込めない。横浜のMM21では、既存の倉庫の活用の方に後から流れた。
- 隅田川沿いなどには、既存の小さい建物がたくさんある。

○○：・起業家向けに、「ここを自由に使って」という様なコンテストでもやった方が、良いアイデアが出る。

- 起業家支援も大切である。

○○：・企業だけではなく、“地域”も大切である。

- 企業等からの提案があって、地元と合意形成する仕組みができると良い。

○○：・地域の人が入った会社組織ができ、そこが包括占有をもらってやるという様なことができると思う。

○○：・アーティストの力・能力を借りるべきだ。

- 彼らが水辺に来ると、ものすごい創造力が沸いてくる様だ。この表現力・発信力を活用すべき。たいして予算はかからない。

○○：・名古屋の中川運河でも、ニューヨーク帰りの女性が活躍している。

○○：・今、廃校がそういう人達の活動拠点になっている。

- それを水辺に持ってくるとか、雑居ビルで行うとかやると面白いアイデアが出ると思

う。

〇〇：・私達では思い浮かばないようなお話しが聞けた。これがまさに情報発信だと思う。

〇〇：・こんなに盛り上がり、大変楽しい。

・これをまとめるのは大変だと思うが、次回、メッセージ集の方針が示される様なので、それを議論しましょう。

#### (4) その他

- ・〇〇より、ミズベリングの紹介を行った。
  - ゆくゆくは行政と市民・民間の中間で色々なことをコーディネートしていくような事務局に育っていく第一歩として取り組んでいる、「ミズベリングプロジェクト」をご紹介する。
  - 「ミズベリング」は「水辺」と「輪（リング）」から作った造語。何かをやるときにみんなで共感をもてるような言葉が必要であろうということで考え、近々打ち出していこうとしている。また、「現在進行形」「未来に向かって動いている仕組みが必要」という想いも込められている。
  - 行政からではなく、外側の発信力のある方に発信して、行政に打ち返していただくことを考えている。
  - 「つなぐ」「かたる」「ためす」「つくる」「そだてる」という想いを込めて実施していくつもりである。
  - そのためのツールとして、色々なツールを用意して、アーティストとの輪をつないでいく、などいろんな仕組みを考えている。
  - 正式には今月末に始動する予定である。
- ・事務局より資料4を用いて今後のスケジュールについて説明を行うとともに、最終的なメッセージ集に向けて、今後メッセージの寄稿依頼がある旨の連絡を行った。
- ・〇〇よりミズベリングの情報公開について質問があり、ミズベリングの活動情報の伝達は特に問題ない旨を国土交通省より回答した。

以上

「水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会」  
 コメンテーターリスト

(敬称略・50音順)

	氏名	所属	出欠
コメンテーター	井出 玄一	一般社団法人ボート・ピープル・アソシエーション代表理事	○
コメンテーター	伊藤 香織	東京理科大学工学部建築学科准教授	×
コメンテーター	金井 司	三井住友信託銀行株式会社理事・CSR 担当部長	○
コメンテーター	岸井 隆幸	日本大学工学部土木工学科教授	○
コメンテーター	忽那 裕樹	株式会社 E-design 代表取締役	○
コメンテーター	久米 信行	久米繊維工業株式会社取締役会長	○
コメンテーター	紫牟田伸子	紫牟田伸子事務所代表	○
コメンテーター (座長)	陣内 秀信	法政大学デザイン工学部建築学科教授	○
コメンテーター	藁田 博行 (代理)	大阪府都市整備部河川室河川環境課長	○
コメンテーター	辻田 昌弘	三井不動産株式会社 S & E 総合研究所長	○
コメンテーター	遠山 正道	株式会社スマイルズ代表取締役社長	×
コメンテーター	中島 高志	東京都建設局河川部長	○
アドバイザー	渥美 雅裕	国土交通省水管理・国土保全局河川環境課課長	○
アドバイザー	藤井 政人	国土交通省水管理・国土保全局河川環境課河川環境保全調整官	○